

佐藤春夫『南方紀行』の中国近代（五）

——「集美学校」の青いバラ——

河野龍也

一 集美学校について

廈門島対岸の臨海部に位置する集美には、現在「集美学校」と称する広大な学園都市が形成されている。もとは小さな漁村に過ぎなかった集美を、中国全土に知れ渡る近代教育の先進地に変えたのは、この地の出身者でシンガポールのゴム・プランテーション経営により財を成した南洋華僑の陳嘉庚（一八七四〜一九六一）・陳敬賢（一八八九〜一九三六）の兄弟である。

辛亥革命を機に、興学報国の志を抱いた陳嘉庚は、手はじめに集美の各集落に散在していた私塾の廃止を説き、一九一三年一月二七日、陳氏祖祠において高等科一年、初等科四年からなる郷立集美両等小学校を開学した。陳士衡

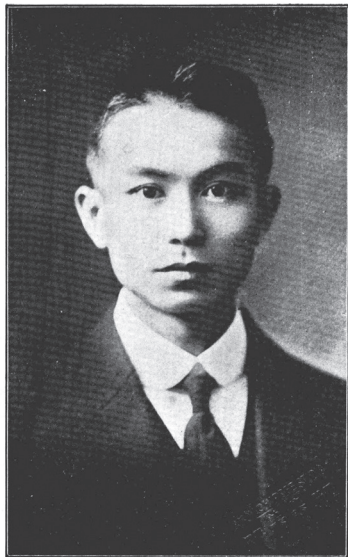
（鏡衡）ら教師五名、児童二三五名での出発だった。四月、集落西側の養魚池を埋めて木造校舎を建て、秋から新校舎を使用。さらに一九一七年二月には、陳敬賢の夫人・王碧蓮を責任者とし、父兄に女子教育の必要性を説いて児童六〇名を集め、集美社（社は集落の意）の向西書房に集美女子両等小学校を開学した。集美はいち早く、男女の別なく初等教育を受けられる環境が整備された地としても特筆される。

佐藤春夫が訪問した一九二〇年の前後は、学園建設の最盛期であった。各地の教育視察を終えた陳敬賢は、着々と校舎を建設し教師を集め、一九一八年三月一〇日、集美師範学校（三年制の師範講習課と五年制の師範予科各二学級）および附属の集美中学校（四年制一学級）を発足させた。

両校の学生総数一九六名。いずれも月謝は無料の上、華僑の子弟が中学入学に不適格の場合は、先に補習が受けられる制度を設けてあった。そのため、南洋の親元を離れ、学



生先庚嘉陳主校



生先賢敬陳主校

図1 陳嘉庚と陳敬賢(集美学校校主)

園を家とする学生が次々と集まり、集美は華僑と祖国をつなぐ架け橋になった。この時期には他にも、幼稚園(一九一九年二月、渡頭角向東祖祠を借用)、水産科(一九二〇年二月)、商科(同八月)が相次いで設立されている。

当時の学校の規模について春夫は、(この学校では工業学校やら高等師範やら大分さまざまな学校が混成されてゐるやうに厦門で聞いたやうに思ふが、それはすこし景気のいい噂か、でなければ私の聞きちがひであつたと見えて、予科本科二科から成り立つ師範学校と、前掲の学科表による中学科、外に中学程度の商業科及び女子高等小学校だけしか今はないらしい)と記している。開学前の商科(四年制二十数名)に言及する一方で、既成の水産科(四年制四五名)には言及がない。両者とも当時はまだ中学附設だった(一九二三年二月分離)。

一九二二年二月二三日、学校の総称を「福建私立集美学校」とすることが正式に定められた。この頃の学生総数は一四〇九名(一九二二年九月)。その後も女子師範(一九二一年二月)、高級師範(一九二五年八月)、農林部(一九二六年春)、国学専門部(一九二六年九月)、幼稚師範部(一九二七年九月)を加えて、現在に至る学園の基礎がほぼ完成した。春夫が翌年開学と伝えている厦門大学も、校舎建設は

一九二〇年五月九日（国恥記念日）から厦門南郊の演武場の地で始まっており、翌一九二一年四月六日、集美学校を仮校舎として開学式を挙行、一九二二年二月に新校舎へと遷った。こちらも開学以来すでに一〇〇年、営々時を経て今なお大学として健在である。¹⁾

さて、これまでも述べたように、佐藤春夫の『南方紀行』（一九二二・四、新潮社）は、一九二〇年代の日本人による中国旅行記がとかく漢詩文への憧れを前提とするものだったのに対し、むしろ中国の近代化に関心を寄せている点に最大の特色がある。厦門が名所旧跡の類に乏しい土地柄だったこともそれに一役買っているが、より重要なのは、そこが世界的規模を持つ華僑の根拠地だったことだろう。

辛亥革命が成功した背景には南洋華僑の経済的支援があり、その後の中華革命党の活動にも、彼らの資金が提供されていた。華僑が抱いた祖国救済の志は、故地の公益事業にも向けられ、それがやがて中国の自発的な近代化の原動力になっていった。厦門が外国資本に依存しない社会改造と愛国運動の中心地として注目を集めたのは、華僑社会との強い結びつきを考えれば必然的だったと言える。

『南方紀行』の他とは異なる個性も、中国自前の近代化が進むモデルエリアを旅したという特殊な経験に由来する部分が大きかったはずだ。その意味で、華僑の教育事業を

扱った「集美学校」の章は、厦門という場所と『南方紀行』という紀行文双方の特色が凝縮された章と言ってよいだろう。本稿では、春夫の集美訪問の実質に迫り、その旅行記の性格をさらに明らかにしていくことにしよう。

二 見学の経路と実情

佐藤春夫が鄭の案内で集美を訪れたのは、「集美学校」によれば〈厦門へ来て今日で第八日目〉のこととされている。父豊太郎宛の書簡と大阪商船蘇州丸の航行状況から、彼らの厦門到着が一九二〇年七月二二日だったことははっきりしているから、額面通りに読めばこれは七月二九日を指すことになる。だが、〈何時も行動を偕にしてゐる鄭を相手にやつと思ひ出して八日分の短い日記を書き終つた〉という記述からすると、集美に向かう前日までの八日分をまとめて書いたはずだから、まだ書くべきことのないこの日は、さしあたり七月三〇日だったと見るのが妥当ではないのだろうか。こう考えると、〈今夜は六月の十五日だ。満月だから夕方から月を見ながらお帰りなさい〉という別の一節との矛盾もきれいに解消される。一九二〇年の旧暦六月一五日は、新暦七月三〇日に相当している。²⁾この日の集美の参観経路を少し詳しく追ってみよう。

一九二〇（民国九）年七月三〇日の当地方の天気は晴。気温は華氏九〇度（摂氏三二度）だったと記録されている（蔣介石日記）。養元小学校の宿舎に滞在していた春夫と鄭が、舢舨サンボに乗って鼓浪嶼を出たのは九時頃らしい。予定通りであれば集美の浜には正午前についた。（三時間もすれば、正午前には集美へ着く）。煉瓦で築いた校門をくぐって校舎に向かう。（大ホール）で開催されていた（クリスチャンの親睦会）で鄭の知人に出会い、彼に導かれて（寄宿舎の食堂）に入る。（ざつと二百人ぐらゐ）の中学生たちに交じって昼食を終え、食堂を出ると、狭い軒下に陳鏡衡が休んでいた。（この学校の校医で兼ねて支那文学の講師）だという。すぐ脇の彼の小部屋に招かれ、茶でもてなされて（半時間以上）をそこに過ごす。漢詩で来遊を歓迎された答礼に、日本語で出まかせの歌を贈り冷汗をかく。再び（大ホール）に来ると、先の青年が（学校からは十町ほど距れてゐる集美の村落）にあった（集美女子高等小学校）の建物まで連れて行ってくれる。一瞥して戻ると、（ホオル）では（七八十人）の青年たちが（懇親会の余興）に（謎灯）³を楽しんでいた。再会した知人との挨拶に忙しい、鄭と別れ、一人で校舎を見学する。（玄関の突きあたり）に、校主陳兄弟の大きな写真額が掲げているのを見て、（些不愉快な氣）になりかけるが反省する。（ホール）で鄭と合

流し菓子をもたらたあと、（若い職員の合宿室とでもいふやうな部屋）に移るが、談笑の輪には入れない。所在なく卓上にあつた（確か「女子青年」といふ名）の雑誌を手にする、三ページにも満たない（小説「藍色玫瑰花」）を読み始めた。鄭に促されて部屋を出たのが（三時半）。月夜を楽しみながら帰るよう勧められるが、（二時の約束の舟人が待ちくたびれてゐるだらう）と思つて辞退。（クリスチャンたちの午後の会合が初まる合図）に、（学校の鐘）が鳴り響くのを聴きながら帰路につく。

現地語の会話がまるで分からない中、通訳とさえ慣れない英語だけが頼りの学校訪問であつた。目の前の人々とうまく交流が持てないもどかしさや孤立感を、こんな場合に誰もが感じるようなりアルさで描き出しているのが春夫の巧みなどところである。様々な部屋に入入りする経路が妙に詳しく書かれているのも、言葉の通じない土地の知らない校舎の中を、不安と好奇心の入り混じつた気分分、もの珍しく見回しながら歩き回る旅人の視線を感じさせる。何気ない文章に新鮮な緊張感がみなぎり、読者を小さな冒険に誘いこむような一章に仕上がっている。

「集美学校」の末尾は、「福建私立集美学校九年秋季招生簡章」という入学案内の冊子から、中学校のカリキュラムのページを破り取って貼り付けた体裁になっている。執筆

時にこれが手元にあったことは、細かい記憶を手繰り寄せ
るのに有用だったろう。移動の経路がよく書かれているの
は、校舎の見取図を参照しながら書いたためかも知れない。
残念ながら、この冊子の現存はまだ把握できていない。

しかし、一九二〇年一〇月に発行された『集美學校校友會
雜誌』の「已成校舎表」からは、同時期の建物の規模や用
途を知ることができ、一九二三年五月八日の建校一〇周年
記念の式場案内「集美學校十週紀念會路線圖」と照合すれ
ば、その配置を知ることができる。『集美學校二十周年紀
念刊』^①によって前者の情報に竣工年月を補ったのが別掲の
【表】であり、それぞれの位置を番号で地図上に対応させ
たのが【図2】である。

春夫は当時の集美学校の印象を次のように語っている。

舟が進むに従つてだんだんと、大きな屋根の一部分が
見えだし、やがて赤煉瓦の長い大きな建物が濃密に晴
れ渡つた空の下にくつきりと立つてゐるのが正面から
見えて来た。それが集美学校である。(略)その赤煉
瓦の広大な二棟は二階建ちで、その外に幾つかの低い
屋根が高低錯雑して連つて見える。東京の怪しげな私
立大学の校舎などよりずっと宏大である。煉瓦で築い
た校門をくぐると、この校舎が未だ普請中だといふの

でところどころに煉瓦が積み重ねてあつた。

その頃の集美学校は、まず入江の養魚地を埋め立てて校
庭(14)としたところに、時計台のある木造平屋の小学校
舎が南向きに建てられていた(16)。その北(2)と西(3)
を取り囲む二階建ての煉瓦棟に中学および師範学校の事務
室と教室が入っている。建物配置上はここが正面にあたる。
春夫が(誰も目の眼に触れるやうなところ)へ(校主の陳兄
弟の大きな写真が二つ並べて額になつてゐるのを見た)と
あるのは、一階に校主事務室のあるこの居仁楼(2)だつ
たのだろう。校訓の「誠毅」(一九一八年四月)の扁額も
掛けられていたはずである。

この教室棟の背後にまわると、三方にめぐらした排水路
に橋が架かつていて、学生たちの生活の場がある。三階建
ての教員室(4)を中心に、左右に二階建ての学生寮(5)
⑥をつなげた建物群はそれぞれ、(太上は徳を立つる有り、
其の次は功を立つる有り、其の次は言を立つる有り、久し
と雖も廢せず(太上有立德、其次有立功、其次有立言、雖
久不廢)、『春秋左氏伝』襄公二十四年)から名を取り、
まとめて「三立楼」と呼ばれていた。春夫が見たという(赤
煉瓦の広大な二棟)というのは、前面の教室エリアと後面
の寮エリアとに二分された建物群の適切な観察と言える。



図2 集美学校十週年
紀念會路線圖
(1923.5)



図3 集美学校正面 (1918年)

建物名	竣工	階数	用途
①礼堂	1918.12	2	ホール (1F)、教員室 (2F)
②居仁楼	1918.1	2	校主事務室・自修室等 (1F)、教室 (2F)
③尚勇楼	1918.1	2	教室・学生応接室等 (1F)、図画教室等 (2F)
④立德楼	1920.2	3	事務室等 (1F)、応接室・教員室等 (2F)、校長室・教員室 (3F)
⑤立言楼	1920.7	2	東寝室 20 室
⑥立功楼	1918.5	2	西寝室 19 室、体操器械室 (1F)
⑦博文楼	1920.11	3・2	新寝室 15 室、来賓寝室 1 室、図書館 (3F)
⑧約礼楼	1920.11	2	新自修室 36 室・舎監室 (2F)・閲覧室 (1F)
⑨集賢楼	1920.9	2・1	医院・介護室 (1F)

『集美學校校友會雜誌』(1920.10) による建物一覧

普請中のもも含まれる。さらに音楽室、⑩理化・手工教室 (1921.2)、⑪東食堂 (1920.12)、⑫西食堂 (1918.3)、厨房、⑬浴所 (1918.2)、発電所 (1918.5)、洗面所 (1918.1)、東厠、西厠 (以上平屋)、⑭前運動場 (1918.1)、⑮後運動場 (1920.8) の記載あり。ほかに⑯小学校木造校舎 (1913.8、1914.8 増築) があった。

両エリアの中間部には、東西対称形に木造平屋の食堂があり(11)(12)、ここは雨天体操場を兼ねた。東食堂(11)はまだ完成していなかったため、春夫が食事をしたのは西食堂(12)の方だったはずである。その日、ヘクリスチヤンの親睦会が行われていた大ホール(1)は、二つの食堂に挟まれた場所にあった。建物の配置図を見ると、人流の動線がすべてここに集まるように計算されているため、春夫たちの行動が常にホールを起点としていた訳がよく分かる。

なお、【図2】を見ると、一九二〇年夏の段階ではまだ計画なか普請中で使用されていなかった建物が、数多く新築され活用されていることに気が付く。中学部(即温楼 1922年四月、明良楼 1922年六月、允恭楼 1923年八月)、女子師範部(尚忠楼 1922年二月、誦詩楼 1922年九月)、小学部(延平楼 1922年九月)、科学館(1922年九月)などは、春夫の訪問以降に完成した建物である。やはり春夫が見学したとき、(別に手入れもして居ない)大きな民家に間借りしていて、(わざわざ見るべきものは何もない)と書かれた女子小学校も、一九二二年二月に女子師範部の附属となり、集美社の書房(祖祠)から新校舎へと移転している。春夫の訪問は集美学校草創期の総仕上げの時期にあたる。建物図の検討からは、いか

に勢いのある拡大発展の途上にあつたかを見て取ることができよう。

三 閩南激励団

ところで、春夫が作中で触れている(ヘクリスチヤンの親睦会)とはどのような性格の会だったのか。集美学校の校史で学事から調べても関連する記載はない。だが、一九二一年版の『中華基督教會年鑑』には、英国長老教会(プレスビテリアン)の牧師で安海出身の許聲炎による報告文が掲載されている。⁵⁾この会は名を「閩南激励団」といい、集美学校はその第三回会合に会場を提供していたことが分かる。

報告文によると、「閩南激励団」とは他の地域の「夏令会」「修養会」などに相当する聖書研究会の当地での名称だという。福建南部の布教活動の低迷を受けて、厦門青年会(YMCA)幹事の米国人伊理雅(Thomas M. Elliott)による提唱と出資のもと、米英両長老教会および英国ロンドン教会の承認を得て夏に開催されていた。命名はコリント後書五章一四節の、(原来基督的愛激勵我們。因我們想一人既替眾人死、眾人就都死了)(キリストの愛われらを勉せり。我儕思に一人衆の人に代て死たれば衆の人すでに死たる

也)に由来する。参加者は宣教師や青年会員などで中国人も西洋人も含み、年に一度福建南部の基督教教会関係者に研鑽と交流の場を提供していた。

一九一八年の第一回は、ちょうど広東軍政府陳炯明の福建攻略で参加者の減少が見込まれた上に、「激励」の名が革命機関と怪しまれ、北洋政府から警戒される一幕もあった。そのような波乱にもかかわらず、同安啓悟学校の会場には各地から一二〇名が集まる盛況ぶりだったという。停戦後の一九一九年に同じ会場で行われた第二回も、参加者をさらに集めて好調だったとされる。

一九二〇年の第三回閩南激励団は、陳嘉庚に会場の貸与を打診して快諾を受け、七月二三日から集美学校で開催される予定だった。しかし、西南軍閥の内訌に起因する戦火の再燃で出足が鈍く、その上強風の影響で二日から四日まで水上交通が途絶する不運に見舞われた。会期は三日短縮して二六日開会に変更したが、幸い厦門との交通が復旧すると、続々と参加者が集まってきて総数は約一〇〇人に達したという。第三回には紀要が残されており、会のプログラムをさらに詳しく知ることができる。⁶⁾

七月二六日午後七時、集美師範学校礼堂の開会式で陳嘉庚が歓迎の辞を述べる。その後、翟輔民牧師 (Robert Alexander Jaffray) の「よめる演説」萬多馬牧師 (Thomas

Brown) によるコリント前書の連続講義一回目があった散会。翌日以降は毎日七時一五分からの朝の祈禱に続いて、午前中は九時・一〇時・一一時、午後は四時(八月一日の最終日は三時)・六時以降開始のメニユーが並ぶ。内容は講演・布教研修会・聖書輪読会・各種議事などさまざま。そのうち、春夫が集美を訪れたと思われる七月三〇日と、訪れた可能性も捨てきれない二九日に関しては、プログラムを整理して次に訳を掲げる。

二九日 木曜日

早朝七時一五分 「早朝祈禱会」黄滄海牧師指導

午前九時 「コリント前書概説」萬多馬牧師講

演

午前一〇時 「布教問題」継続討議 研究組・布

教組・靈修組

午前一一時 「教会における児童の位置」韋玉振

牧師夫人演説

午後四時 「ヨセフ等に学ぶ」聖書講読班 四

班討論

午後六時四五分 「ダニエル一生の祈禱」翟輔民牧師

戶外演説

午後七時四五分 「使徒行伝一章一十一」翟輔民牧

師演説

三〇日 金曜日

早朝七時一五分 「早朝祈禱会」 周之徳牧師指導

午前九時 「ヨセフ等に学ぶ」 聖書講読班 四

班討論

午前一〇時 「基督教救国組覆議案」 全体合同決

議

午前一一時 「ルカ伝一二章三三」 劉向榮牧師演

説

午後四時 「集美学校を経営して」 陳嘉庚講述

午後七時半 (空欄)

毎日昼から午後四時までには空き時間となっているが、プログラムの最後に（以上の集会日程以外に毎日三時半の談話会、五時の体育運動遊泳などの娯楽があり、会員交流の好機となった）と書かれている。春夫の言う三時半に鳴った（学校の鐘ベル）とは、休み時間の終了と談話会の開始を告げるものだったのだろう。

さて、この二日間のプログラムでまず注目されるのは、三〇日午後四時から陳嘉庚の講演が行われていることである。三時半に帰った春夫は、多大な関心を抱いて『南方紀

行』に登場させた陳嘉庚その人の風貌に接する機会を逸してしまつたことになる。

また、二九日午前一一時に登壇した韋玉振牧師夫人の名も興味を惹く。なぜなら、彼女こそ春夫が「集美学校」の中で次のように紹介している人物らしいからである。

厦門地方の一般知識階級の信仰を基督教化した第一の有力者は或る独身の米国婦人だといふ。この婦人は二十幾歳から四十歳の今日まで二十年間、さうして今も尚ひきつづいて経営してゐる幼稚園で幼児に与へた感化であると聞いた。現時中流以上の家庭の三十歳以下の青年少年及び幼童でこの婦人の幼稚園に遊ばなかつた者は殆んど無いと言つていいさうだ。

英国長老教会牧師の夫・韋玉振 (George M. Wales) と共に鼓浪嶼に來た韋愛莉は、一八九八年、四歳から六歳のキリスト教信徒の子女を対象に家庭式幼稚園を開設した。これは中国最初の幼稚園の一つに数えられている。やがて規模を徐々に拡大した彼女の幼稚園は、一九〇九年以降教会に委ねられ、一九一一年に懷徳幼稚園と名を定めた。さらに次の年には、鼓浪嶼日光岩下の独立した新築園舎に入り、後に日光幼稚園と改称されて今も同じ場所に存続して

いる。一九二〇年に二〇年以上の経営実績を持つ幼稚園と
言えば、中国全体で見てもほぼ皆無であるから、この幼稚
園以外には考えられないのである。

《独身の米国婦人》という部分に疑問はあるが、プログ
ラムの《韋玉振牧師娘》という中国語を日本風に解釈して
読み違えた結果とすればむしろよく理解できる。また春夫
が言うほどの地で影響力のある幼児教育者なら、やはり
彼女の名を最初に挙げなくてはならない。韋愛莉自身が「閩
南激励団」の参加者であることを知ったら、案内人の鄭は
必ず懐かしんで春夫にそのことを語ったはずである。それ
が春夫の紀行文に取り入れられたと考えればすべて不自然
はない。

二人の集美参観が本当は二九日で、正午前に到着すると
ちようど彼女の講演が終わるところだったというのが真相
ならさらに劇的かも知れない。しかし、それなら実際に会っ
たことをなぜ書かなかったのが問題になるだろう。訪問
日を三〇日と見るべき理由はこんなところにも存在する。

四 青い薔薇

最後に、春夫が控室で読んだという小説「藍色玫瑰花」(青
いバラ)の真相について触れておきたい。春夫が紹介して

いるこの小説の内容とは次のようなものである。

ある国王の一人娘には婿君の候補に三人の公子があつた。才智風格いずれも相譲らぬ公子で、国王も王女も誰を花婿に選ぶべきかを迷った。そこで国王は公子たちに難題を出した。来年の娘の誕生日に催される球会(此は舞踏会の誤りであらう)と注釈されている)には姫の白いドレスに青いバラの花を飾らせてやりたい。それを叶えた者に姫との結婚を許すつもりだと。第一の公子はそれから書斎に籠って植物学の書物を調べた。青いバラの記述はどこにもなく、科学の力でそれを得る努力もしたが無駄だった。第二の公子は世界中の山野や庭園を歴訪して探したが、人々に笑われるだけだった。第三の公子は、それを王の庭で見つけたと言った。彼は姫を月に照らされた庭の噴水のほとりに誘って、いかにこの一年姫をこの場所で偲んだかを語った。姫はそれ以上、あえて青いバラのことは聞かなかつた。それから王が青いバラのことを尋ねたとき、姫は面を伏せて「あつた」と答えた。翌日の姫の誕生日になると、王は娘の結婚相手が決まったことを人々に知らせた。話としては「竹取物語」を思わせるような典型的な難題求婚譚である。その小説が載っていたのは上海の『女子青年』という雑誌だったが、執筆時の春夫の手元になく、内容も掲載誌もすべて記憶にもとづくものだといふ。

誌名からは、基督教女子青年会 (YWCA) の機関誌らしいという推測までではあるが、現存雑誌のなかに同一名称のものを確認することはできなかった。また作者についても、(翻訳もので羅馬字で原作者の名を上げてあるが、それは私の知らない誰かで、訳者は多分閩秀文士であったやうに記憶する) というはなはだ曖昧な記述があるに過ぎない。どこまでが原話通りかも分からず、場合によっては春夫の創作とも思われる得体の知れない物語で、出処の特定はかなり困難だった。

だが、ようやくここに有力な類話を見つけることができた。それは一九一九年一二月に張謇・黄炎培・王正廷らが上海で創刊した総合雑誌『民心週報』(一九二二年一月停刊)の第二卷第二〇期(一九二二年四月一六日発行)に掲載された雲舫「藍玫瑰」という文章である(五四三〜五四四頁)。上下二段組一頁相当の長さの二回連載と思われるが、管見では後半部を載せた第二二期の雑誌が確認できていない。⁽⁸⁾雲舫とは、米国聖公会系のミッシェンスクールだった上海聖約翰大学政治系に在学中の劉雲舫のことと考えられる。そして在学校と教会との関係から言っても、雲舫がこの「藍玫瑰」の初稿にあたるものを先に青年会系の雑誌に載せていたとしてもおかしくない。春夫がそれを集美学校で読んだ可能性は十分に考えられるのである。

さらに調べると、「藍玫瑰」は雲舫の創作ではなくやはり翻訳であったことが明確になった。アメリカ女性作家のリサ・イザイ・タロー (Lisa Ysaye Tarleau, 1878-1952) が、一九一九年一月発行の *The Atlantic Monthly*, vol.124 に掲載した *Blue Roses* がその原作である(六一四〜六一五頁)。前半のみの照合ではあるが、雲舫の訳文は原作にはほほ忠実なものであるため、ここでは全体が残っているタローの原作の方を、拙訳によって紹介しておくことにしたい。(原文は本論末尾に付録として示す。)

青いバラ

リサ・イザイ・ターロー

昔々、たいへん美しいお姫様がいました。髪は磨かれた黄金のようで、黒い瞳は神秘的、笑顔は柔らかくて甘さがこぼれるようでした。三人の王子が姫に結婚を申し込んでいました。三人ともハンサムで若くて勇敢。三人とも裕福で誇り高く情熱的。三人とも「騎士道、真実、名誉、自由、礼儀」を愛する『カンタベリー物語』（チヨースー）のナイトのようでした。問題は、姫が誰を夫に選ぶかということだけでした。宮廷中が迷いました。聡明な婚姻学者たちも白髪頭を横に振って、結論を出せなかつたのです。

とうとう老王は待ちきれなくなりました。「この問題は古き良きやり方で処理せねばならぬ。」王はそう宣言しました。「年古りた、いにしへの年代記の中で、常に行われてきたやり方だな。三人の王子たちに課題を与えよ。そして最も成功した者が姫の手を取るのじゃ。」こうして問題は一件落着いたのでした。

翌朝、姫は最初の求婚者を呼んで語りかけました。

「明日、王宮で盛大な舞踏会があります。私はすばら

しい水色のドレスを着ようと思いますの。涙を知らぬ目のような青。決して雲に覆われぬ春の空の青。夏の狭霧に隠された遠くの景色のような青。それは青いものすべてのうちで最も青い色。私はこの青いドレスに真つ青なバラの花のブーケをつけたいのです。手に入れてくだらない？」

「青いバラですって？」王子は言った。「まさかそんなものはありませんよ。赤いバラのことでしょう。」

「いいえ」と姫はきっぱり言いました。「青ですわ。青、青！ 赤が欲しいならはじめからそう申したはずです。青いバラが欲しいのです。一刻も早く欲しいのです。」

「青いバラなんて聞いたことがない。」王子は言いました。「あなたの間違いに決まっていますよ。」

「間違っていますせん。」姫はむきになりました。「青いバラはきつとあります。もしなかつたら、どうしてそれを望むことができますの？ 輝かしい夢は、より輝かしい現実の最も確実な証拠ではありませんか？ そして私たちの願いはいつも本物で、いつかどこかで正しいと認められるものではありませんか？ 私の心が青いバラを求めるのなら、青いバラは心の正当な要求なのです。さあ行つて。そして持つてきて頂戴。」

大變科学的なこの王子は、そんな非論理的な言葉に憤慨し、この問題を議論で片付けようと企てました。王子は植物図鑑と園芸年鑑を持ちこみ、リンネやデ・カンドールなどの権威ある説を引用して、あらゆる点から青いバラの完全な不可能性を証明しました。しかし、王子の行いは、姫をかんかんに怒らせただけでした。

「私は青いバラが欲しいのです。」と姫は言いました。「本も図鑑も権威もすべてどうだっていい。私は知恵が欲しいわけではないの。不思議が欲しいの。青いバラをくださる気がないなら、あなたの愛なんて、ふだんいかにも情熱的なふりをして、全然なのね。見損なつたわ。永遠にお別れするのが一番ね。」

王子は抗議しましたが無駄でした。とうとう王子は宮殿から立ち去らねばなりません。傷つき、失望して。それから姫は二番目の求婚者を呼びました。

「明日、王宮で舞踏会があります。」彼女は言いました。「私は水色のドレスを着ようと思いますの。四月の空のように青く、真実の愛の目のように青く、ニンフが遊ぶ美しい湖のように青く、谷間にひっそり咲く花のように青いドレスを。この驚くほど青いドレスに、私は青いバラをつけたのです。どうか、持ってきてください。」

「喜んで。」王子は答えました。「すぐに探し出しますよ。」

言い終わる間もなく、王子は駿馬にまたがりました(おとぎ話の中では、王子はいつも駿馬に乗っています。牝馬に出番はないようですね)。そして姫のために青いバラの花を求めて馬を駆りました。王子はいたるところを探し、すべての庭を調べ、すべての公園や宮殿の門をノックしました。けれども探索は無駄でした。王子は決して青いバラを見出さなかつたのです。王子は重く悲しい心をもつて、遠い故国に帰りました。心に宿つた倦怠と悲嘆にさいなまれながら。

それから王女は三番目の求婚者に語りかけました。「明日、王宮で舞踏会があります。私は美しい青いドレスを着ようと思いますの。地上天上の何よりも青く、神の恵みを受けた聖人の衣のように青い。青それ自体のようなドレスを。ああ！それは素晴らしくよく似合いますの。このドレスに、私は青いバラの花をいくつかつきたいのです。あなたは私のために、それを手に入れてくださいますの？」

「もちろん。」王子は答えました。「そんなにたやすいことはありませんよ。私のいとこのブラバントの王女は、

青いバラであふれるような庭をそっくり持っています。彼女は喜んで青いバラをどっさりあなたに贈ってくれます。全くとびきり空費をしたものです。それが今は何の役にも立たないんですから。いとこにしろ女官にしろ、もう青いバラなど自分では身に着けようともしないのです。絶世の美貌すら台無しにするし、ろうそくの光では特に下品に見える、みんなそう言っていますよ。この世にまだ青いバラを欲しがっているなんて、いとこはたいそう嬉しがるでしょうなあ。お許しただけなら、今すぐブラバントまで使者を遣わしましょうか。」

「あの、よろしいんですの。」と王女は言いました。「別に急ぎませんもの。お庭にご一緒して、このバラの植込みを見てみましょう。結局ドレスには、たぶん赤いバラをつけると思いますわ。色のコントラストってけっこう大事ですね。」

そして二人は庭に入り、翌日結婚しました。私を知る限り、その後二人はずっと幸せに暮らしました。

数年後、三人の王子が隣の国の王様の宮廷で出会いました。昼の激しい狩猟、夜の激しい乾杯を共にして、深夜にはかなり打ち解けました。そして求愛と結婚、男と女、愛と青いバラについて語り合いました。

最初の王子は言いました。「青いバラ！ 何と愚かな！ 女に知性などない。」

二番目の王子は言いました。「青いバラ！ 何という悲劇！ 女は夢にすら不実だ。」

三番目の王子は言いました。「青いバラ！ 何と無用な！ 女には話術あるのみ。青いバラなんていらぬのさ。」

三人の王子がそれぞれの経験から、青いバラの長年の謎にこんな結論を下し終えた頃、庭園は月に口づけされた夏の夜の魅力にすっかり浸っていました。暗がりの茂みでは、ナイチンゲールが甘い神秘の歌声を奏でていました。珍しい花々はかぐわしい香気を放ち、芝生さえも露に濡れて生き活きと、楽しくひたむきな命に震えていました。そして最も暗い片隅の、大理石の築山の上には、うら若い王女が、勇敢な若き騎士と一緒に腰を下ろしていました。二人の目は輝き、手は臆病に触れ、最初の情熱の輝きが頬を赤く染めていました。若さというものが常に愛を求めるように——若い王女は優しい声で、騎士に青いバラの花を届けてほしいと願うのでした。(拙訳)

雲舫の訳については別に詳細な検討を行いたいが、今取り上げておくべき点は、原作で *Tomorrow there is a great ball at court.* となっている部分を、雲舫が「明朝皇宮中設球戯」と訳していることである。春夫の記憶ではここが「球会」という形に変換されているが、訳文が *Ball* を舞踏会ではなく球（ボール）と読み誤っているという点では一致している。また、原作と春夫を読み比べると、全体から受ける印象には決して無視できない違いはありながら、三人の公子の描き分けと二人の失敗談にははっきりとした共通性がある。発表の時期、誤訳の特徴、ストーリーの *Blue Roses* を劉雲舫が訳した「藍玫瑰」と考えてまず間違いはないのではあるまいか。

だとすると、記憶のみに頼って再現された春夫の物語が、リライトとして原作をしのご完成度を持っていることに、改めて驚嘆せざるを得ない。原作の姫君は怒りっぽく見栄張り、公子の方でも女性に敬意を持ち合わせているようには見えない。おとぎ話の形式に隠しながら、ターローの原作は男女の思惑のすれ違いと、経験が人を老いさせる悲しみとを相当辛辣にえぐり出している。

一方で春夫の方は、青いバラを花そのものとして捉えず、真実の愛の象徴に読み替えたときにこそ、不可能が可能に

なるという愛の奇跡を描いている。姫君があえて青いバラのありかを尋ねなかったのは、彼女の心に芽生えた愛ゆえであり、それを父が静かに認めて祝福する結末には、女性のみずから愛するものを伴侶に選ぶという、結婚の自己決定に対する共感がある。陳鏡衡の漢詩に対する感想とともに、「藍玫瑰」を新しい恋愛のロマンスへと書き換えてしまふ創造性の中にも、因襲に挑戦し、社会変革を目指す中国の近代化への春夫の期待が現れていることは間違いない。

付記 本稿に活かした二〇一〇年の現地調査において、廈門歴史研究家の故洪卜仁先生からは、今回の掲載写真を含む多数の資料をご提供いただきました。そのお姿を偲びつつ感謝の念にたえません。集美学校委員会の皆様には懇切なご教示を賜り、呉志虹さん、洪瑜瑛さんにも現地取材で様々なご協力を仰ぎました。ここに記して心から御礼申し上げます。

一九二三年以前に公刊された *Lisa Ysave Tarleau* の *Blue Rose* は、米国旧著作権法に基づくパブリックドメインとして原文と訳文を全文掲載しています。

なお本稿は、JSPS 科研費 18K00289 による研究成果の一部です。

- (1) 集美学校草創期の沿革については、周日升編『集美学校八〇年校史』(一九九三・七、鹭江出版社、一〇一七頁)を参考にまとめた。
- (2) 諸誌に分載した紀行文を『南方紀行』に集約する際、春夫が日付を整合化するのに苦慮した形跡は、特に「漳州」の章に著しい。「台湾もの」の一つ「霧社」(『改造』一九二五・三)のように、一四日の月を二五日の月にしたとみられる改変の例もあるため、旅程の検証では、創作的な見せ場を作る意図が実際の日付に優先する場合があります。することも念頭に入れておかななくてはならない。
- (3) 一般的には「灯謎」とするのが正しい。短冊に書いたなどなどを当てて楽しむ遊戯で、台湾・福建地方では、特に元宵節に付随する年中行事になっている。
- (4) 集美学校二十周年紀念刊編輯部編『集美学校二十周年紀念刊』(一九三三・一〇、集美学校、一九二六頁)
- (5) 許聲炎「閩南激勵團」(中華續行委辦會編『第六期中華基督教年鑑』一九二二・二一、同發行、二二五～二二七頁)
- (6) 王宗仁編『第三屆紀要』(一九二二・九、閩南激勵團)
- (7) 许十方・陈高峰「怀德幼儿园」(洪卜仁主编『厦门老校名校』二〇一三・二二、厦门大学出版社、二〇九～二一〇頁)
- (8) 张浩然編『五四新文化运动研究资料汇编』(全四八册)(二〇一九・一、广陵书社)にもこの号は欠けている。
- (9) 同時期、雲舫は上海商務印書館発行の『婦女雜誌』に社説「改造時代の婦女應具什麼資格?」(改造時代の女性はいかなる資格を具えるべきか)(一九二〇年六月)を寄稿しており、女性解放運動に大きな関心を寄せていたことが窺われる。
- (10) ドイツ出身のおとぎ話研究者として著名なりザ・テツナー(Lisa Tetzner, 1894-1963)の『メルヒェン 二一ヵ月 一二月篇』(Die schönsten Märchen der Welt für 365 und einen Tag, 1926、飯豊道男訳、一九八七・一一、未來社)にも類話の「青いバラ」が中国の民話として収録されている(六四～七〇頁)。ターロー原作の劉雲舫訳が、教会関係のルートを通じて再び欧米圏にもたらされ、中国発祥のものと訛伝された可能性はないだろうか。ただしテツナーの結末は、吟遊詩人が姫君に愛を告白するというもので、ターローとも春夫版とも異なっている。類話の生成や伝播については今後の課題である。
- (こ) とうの たつや・実践女子大学教授

BLUE ROSES

BY LISA YSAYE TARLEAU

THERE was once upon a time a princess who was very beautiful. Her hair looked like burnished gold, her eyes were dark and mysterious, and her smile soft and full of sweetness. Three princes were her suitors; all three handsome, young and gallant, all three rich and proud and ardent, all three like Chaucer's knight, loving 'chevalerie, truth and honour, freedom and curtesie.' The question was only whom she should choose for her husband. The whole court was in doubt; the wise Doctors of Marital Law shook their gray heads, but no decision was reached.

At last the old King became impatient. 'One has to handle the matter in the good old style,' he declared, 'as it is done in all the time-hallowed chronicles of the past. One has to set a task for the three princes, and who best succeeds will be rewarded with the hand of the princess.' And thus the matter was settled.

The next morning the princess called her first suitor and spoke to him.

'To-morrow there is a great ball at court, and I am going to wear a wonderful light-blue dress. It will be blue like eyes that have never known tears; blue like the spring sky that has never been cloud-veiled; blue like the distances hidden by summer mist. It will be the bluest of all blue things, and with this blue dress I want to wear a nosegay of perfect blue roses. Can you not go and get me some?'

'Blue roses?' said the prince. 'Why, they don't exist. You mean red roses, of course.'

'No,' said the princess sharply. 'I mean blue ones. Blue, blue, blue! If I had meant red, I should have said so. I want blue roses, and I want them quickly!'

'I never heard of blue roses,' said the prince. 'I am certain you must be mistaken.'

'I am not mistaken,' persisted the princess. 'There must be blue roses. Could I wish for them if they did not exist? Is not a glorious dream the surest proof of a more glorious reality? And are not our wishes always, some time, somewhere, true and justified? If my heart demands blue roses, blue roses are its right. Go, then, and bring them to me.'

The prince, who was very scientific, felt aggrieved at such illogical words, and tried to argue the question. He brought the

botanical atlas and the garden almanac, quoted Linnaeus, De Candolle, and other authorities, and proved in every way the utter impossibility of blue roses; but all he accomplished was to make the princess thoroughly angry.

'I want blue roses,' she said, 'and I do not care a straw for all your books and atlases and authorities. I don't want wisdom, I want wonder; and if you do not care to give me blue roses, your love is certainly not so ardent as you have always pretended. I was mistaken in you, and the best thing is to part forever!'

The prince protested, but his words were of no avail; and in the end he had to leave the palace, hurt and disappointed, and the princess called her second suitor.

'To-morrow there is a ball at court,' she said, 'and I am going to wear a light-blue dress. It is blue like the April sky, blue like the eyes of a true love, blue like fair flakes in which water-nymphs play, blue like hidden flowers that bloom in the glen. And with this marvelously blue dress I want to wear blue roses. Please, do bring me some.'

'Willingly,' answered the prince, 'I shall search for them at once.'

With these words he mounted his good steed (princes always mount good steeds; a mare seems to have no standing in fairy

tales), and galloped away to find the blue roses for the princess. But though he searched everywhere, and looked into all the gardens, and knocked at the gates of all parks and palaces, his quest was in vain. He never found blue roses, and he returned to his far-away kingdom with a heavy and saddened heart, burdened by its own weariness and its own grief.

And the princess spoke to her third suitor: 'To-morrow there is a ball at court, and I am going to wear a beautiful blue dress. It is bluer than anything on earth or in heaven; it is blue like the garments of the blessed Saints; it is Very Blue itself, and oh! it is wonderfully becoming. And with this dress I want to wear some blue roses. Do you think you could get them for me?'

'Certainly,' answered the prince. 'Nothing is easier than that. My cousin, the Princess of Brabant, has a whole garden full of blue roses, and she will be delighted to send you a basket of them. These roses were a terrible expense to her, and now they are quite useless. Neither my cousin nor her ladies care to wear them. They say blue roses spoil even the fairest complexion, and look extremely vulgar in candle-light. She will be so happy that there is still someone in this world who wants blue roses. If you will permit me I shall at once despatch a messenger to Brabant.'

'Oh, never mind,' said the princess. 'There is no hurry about it.

Let us go into the garden and look at my own rose-bushes.
Perhaps, I'll decide, after all, to wear red roses on my dress.
Color-contrasts are often very effective.'

So they went into the garden, and the next day they were
married and, so far as I know, they lived happily ever after.

Some years later the three princes met at the court of a
neighboring king, and after a day's hard hunting and an evening's
hard toasting they became, at midnight, very confidential, and
spoke about courtship and marriage, men and women, love and
blue roses.

And the first prince said, 'Blue roses! How absurd! Women
possess no intellect.'

And the second prince said, 'Blue roses! How tragic! Women
are faithless even to their dreams.'

And the third prince said, 'Blue roses! How unnecessary! If
you but know how to talk to a woman, you do not need blue
roses.'

And while the three princes thus settled finally and for all, out
of their own personal experiences, the age-old question of blue
roses, the garden was steeped in all the glamour of a moon-
kissed summer night. Nightingales were singing their sweet and
mysterious song in dusk-haunted bushes; strange flowers exhaled

a perfumed fragrance; and even the grass was dew-wet, and
herby, and trembling with a joyful, intense life. And in the
darkest corner sat on a marble bank the king's young daughter,
with a gallant young knight. Their eyes were shining, their hands
touched timidly, the glow of a first passion blushed on their
cheeks, and with a tender voice the young princess asked her
knight — as Youth will always ask Love — to bring her blue
roses.

The Atlantic Monthly, vol. 124, pp. 614-615, November 1919